

大和文華館蒐集ものがたり

① 仁清作おしどり香合

大和文華館々長 矢代幸雄

おしどり香合 野々村仁清作
江戸時代
高さ5.1cm



大和文華館を奈良につくることになって、東洋美術の蒐集をはじめたごく最初の頃、すなわち昭和21年に購入した名品のひとつに、名工仁清作のおしどり香合があります。これは仁清が、彼の最も重要なパトロンであった近衛家のために製作し、近衛家の茶会記である槐記(かいき)にも幾度か記載されている由緒正しい作品であります。その購入の当時の私は、茶道についてまるで無経験で、この名香合に対しても何も知識の持ち合わせがなく、私は美術に関する学者あるいは批評家として、自分の目性に多少自信を持っていたというだけであり、ただこの小さくて彩り美しきおしどり香合の可愛らしさにいっぺんに惚れてしまったのでありました。もちろん私は、良い品物を買うには、なまじ「掘出し物」などを狙わず、責任感あるよい商人を選んで買わなければならないということだけはよく承知していましたから、私はこの小香合も、れっきとした名の通った大美術商から買うだけの用心はしていました。私はその高価なものにもびっくりしましたが、とにかく素晴らしい買物をしたと大喜びでありました。しかしながら、それを私の当時の宿、それは河内の道明寺にありましたが、そこに持ち帰り、それを時々持ち出して来て、眺め楽しんでいると、ある時、ふと、私はまことにどきんとしたのでありました。すなわち、あれは本物か、という疑問が頭をかすめたのでありました。

白状しますと、それまでの私の美術の研究なるものは、当時私は上野の美術学校の教授をしていましたので、主として美術史の講義をする準備のための研究でありました。ところが学校で美術史の講義につかうという材料は、たいてい古来の名作であり、従って作品それ自身に関する真偽の間

題などは、学校の美術史の先生には殆ど出てこないものであります。ところが買物となれば、第一にぶつかる問題は、その真偽の問題なのです。そして上等の偽物ともなれば、実にたくみに眼を欺くように出来ています。また講義においては、何か間違ったことをしゃべったところで、あとから訂正する機会がいくらでも出てきます。ところが買物となると、もしも間違いをすれば、ただちに血が出るのです。その頃の私は、美術に関する教授生活30数年のいわばヴェテランであったのですが、それは剣道でいえば、竹刀や木刀を使ってばかり稽古をして、巧者になったようなものにすぎなかったのです。それが今、自分の責任において、物を賣うという真剣勝負に急に立たされたようなもので、実に私は愕然として恐れをなしたのでありました。

このように、自分はこの小さい香合の可愛らしさ美しさに、一目惚れに惚れこんで勢よく買いはしたものの、私は、ふと、ある瞬間その香合が果してよいものか、と急に心配になってきたのです。そうすると、私の心配はやりきれないほど高まってきて、私はこのおしどり香合を思いがけない時間に倉庫から出して来て、それを見てやっぱりよかったと安心したり、あるいはまた、何だかあまり気にしすぎて、かえって一層憂にみえるような気がして、全く悲観したこともありました。それで気を晴らすために急に散歩に出て、道明寺附近の御陵や雑木林のあたりを歩いて、そして再び新鮮になった頭で香合を見直して、やっぱり素晴らしいと安心したりしたものです。

季刊 美のたより No.5

昭和43年 4月1日

発行 大和文華館